

描かれた昭和の「北上山地」

—昭和30年代以降の「チベット」を用いた形容—

岡 恵介*

How the “KITAKAMI mountain country” was described in the Showa period

— Descriptions using “Tibet” after the Showa 30s —

OKA Keisuke

1. はじめに

本稿は、昨年この東北文化学園大学総合政策学論集で発表した「戦後復興期における北上山地像」の続編である。時系列的にはそちらを先にお読みいただければ、よりおわかりいただけるかと思われる。この前稿では、北上山地は「チベット」を用いた形容で呼ばれてきたが、その日本における「チベット」のイメージの受容とその内容、そして昭和初期の東北の農村恐慌の時代に生まれたと思われるこの形容が、昭和20年代(1945～1954)には主に岩手県内で、北上山地の山村地域を指す形容として用いられていたことを明らかにした。

2. 昭和30年代(1955～1964)の「チベット」を用いた形容の変化と浸透

昭和30年代(1955～1964)に入ると、昭和30年だけで14例中7例が「日本のチベット」、昭和30年代(1955～1964)の総計では43例中24例が「日本のチベット」という表現が用いられるようになり、「岩手のチベット」は6例に過ぎない(表1)。「チベット地帯」が6例、「日本のチベット地帯」が2例あり、ほかには「チベット」、「東北のチベット」、「みちのくのチベット」、「チベットの首都岩泉」、「(チベットの)そのまたチベット」、「チベット意識」などの用例が見られ、この形容がさまざまな広がりを持って使用されるにいたったことが推察される。

昭和30(1955)年以降使用が増加した「日本のチベット」は、岩手県の形容として理解した人が多かったから、昭和20年代(1945～1954)に岩手県の特定の地域を「チベット」を用いた形容で呼んでいた岩手の人々が、昭和30年代(1955～1964)以降、逆に岩手県の一員としてその形容で呼ばれる側に立つ、逆転現象が生まれていった。

* 東北文化学園大学教授 Professor of Tohoku Bunka Gakuen University
e-mail: koka@pm.tbgu.ac.jp

しかも「岩手のチベット」の使用は、使用者が特定できない新聞記事における使用の2例を除くと、1955(昭和30)年の岩手大学助教授川本忠平の教科書副読本における使用、1958(昭和33)年の岩手出身作家である石上玄一郎の紀行ルポルタージュ、同じく1958(昭和33)年の岩手大学僻地教育研究会と岩手教員組合による合同調査の報告書、1963(昭和38)年の立命館大学探検部による人文班調査報告書(ただし横田(1950)からの引用で「日本のチベット」も併用)、本多勝一のルポルタージュ中の昭和40(1965)年に書かれた田野畑村の青年の手記からの引用、岩手県岩泉町在住の植本(1994)の著作と、岩手県出身者による表現か、1954(昭和29)年以前の本からの引用であったことが指摘できる。

ではこの昭和30年代(1955～1964)についてみていくと、まず昭和30年には日本交通公社発行の雑誌「旅」の巻頭で「日本のチベット」がグラビア特集となり、田中喜多美(民俗学者)、八木健三(東北大学教授)、石上玄一郎(作家)が記事を執筆し、「チベット」を用いた表現が多用されている。特に石上玄一郎は2年後もう一度「中央公論」誌に「日本のチベットを訪ねて」を書くことになる。またこのときのグラビアのつけられた『不遇なる岩手』のタイトルや『岩手は膨大な未開の山地におおわれた日本のチベット地帯だ、といった人がある』といった解説、石上の「名子と巫女」における冒頭の「岩手県は日本のチベットと言われるが」といった文は、現在までの筆者の調査では、岩手県そのものを「チベット」と形容した表現の初出である。石上は後に別のところで、「岩手は北上山系という閉ざされた地形によって占められており」とも述べていて(岩手日報「岩手の風土と文学」昭和39年6月29日)、北上山地に対して「チベット」という形容を用いるなら、それは岩手全体に及ぶという見方に立っているように思われる。

この年には読売国際ニュース映画でも「脚光あびる日本のチベット」が取り上げられ、映画館で上映された。

1957(昭和32)年には、「中央公論」誌上で8月に「日本のチベット—北上山脈の山村をゆく」が掲載され、12月号では前述の石上のルポ「日本のチベットを訪ねて」が発表された。目次には「既に本誌八月号のグラビアで問題を投げた辺境に、岩手県出身作家が自ら足を踏み入れた」とある。石上は札幌市生まれだが父が岩手県出身で、両親の病死後6歳で岩手に戻り祖母に育てられる。1923(大正12)年盛岡中学に入学するが、このころの友人、「和山」(安家地区の東隣、田野畑村出身)が文中に登場する。石上は中学時代、この友人と再三にわたり沼宮内駅から小本街道を歩き、この地域を訪れたと述べているが、これは岩泉の雲岩寺(曹洞宗)が親戚で長期の滞在が可能だったからだった(石上、私信)。中学時代から左翼活動にかかわりはじめ、弘前高校時代検挙されて放校処分となり、盛岡を経て東京に出てさらに活動を続けていたが1933(昭和8)年逮捕され、釈放後、顔見知りだった小畑達夫が共産党スパイ・リンチ事件で亡くなったことを知り、活動に疑念を抱いて左翼活動から遠ざかる。

彼は東北における中央からの侵略・敗残の歴史から筆をおこし、「日本のチベット」をその厳しい自然・歴史・地理・交通・社会経済的条件を細かく記しつつ位置づけている。「チベット」を用いた表現を多用しているが、この時代の岩泉町、有芸村、安家村の現状を、牛の管理費や炭の生産費など細かい数字を織り交ぜながらきちんと描き出し、帰路には知事にも会って、打

開策として「第三種国有林の解放に期待する」という言葉も引き出している。「チベット」と呼ばれる地域が現在あることは、住民にではなく日本の政治の貧困に起因する、というのが彼の主張であり、かつての左翼活動家としてのキャリアと分析力を感じさせるルポである。またこの文では「名子と巫女」(石上、1955)と比べて、「チベット」の表現を用いる対象が岩手県ではなく北上山地とその域内の町村に絞られている。彼はその後、『「日本のチベット」と呼ばれる北上山系中の僻村も殆ど隅々まで歩いてみたが、(中略)貧しくともその貧しさをあまり気にとめぬようなのどけさと安らぎがあった』(『東北にある魔の山』1959「世界」と述べている。「ものいわぬ農民」で喧伝されたイメージとは異なるイメージを北上山地に抱いていたように思われる。

翌1958(昭和33)年は、大牟羅良の「ものいわぬ農民」の刊行がある(奥付では2月17日)。これについてはすでに2章でふれたが、ここでは「日本のチベット」が北上山地や下閉伊郡下の町村ではなく、岩手県そのものの形容として用いられていることに注目しておきたい。版を重ねたこの本によってはじめてこの表現にふれた多くの人たちは、「日本のチベット」イコール岩手県と理解したのである。

同じ年、『週刊朝日』でも7月6日増大号で「日本のチベット北上山脈の農民たち」で写真とルポを掲載した。ここでも横田(1950)などの規定した「岩手のチベット」には入っていなかった、岩手町や葛巻町が取材対象地域に選ばれている。

また、岩手大学の教員有志と岩手教員組合によって「アッカ ―へき地の社会と教育―」が、この年に出版された。岩手大学の歴史・社会科学系の研究者が安家地区を3ヶ月間にわたって総合的に調査した報告書である。第1章の「村のすがた」の執筆を、当時、岩手県教育研究所の佐々木久蔵が分担している。この報告書では「日本のチベット」は用いられず、「岩手のチベット」である。この本は岩手の教育関係者の間では評価が高く、33年後の1991(平成3)年に岩手県教育資料センターから復刻された。

さらに岡田喜秋はその著書「山の奥、岬の果て」の「みちのくのチベット」のなかで、「日本のチベット」および「みちのくのチベット」として岩手県の下閉伊郡を表現している。彼はこの「チベット」を用いた表現を気にしていたようで、「みちのくのチベット」のほかにも「関東のチベット」などの表現を用いている。岡田は長年雑誌「旅」の編集に携わった経歴を持ち、この「みちのくのチベット」はおそらく1955(昭和30)年ごろに書かれたものと思われる。このとき岡田は盛岡から安家村まで、自分の足で2日をかけて歩いたと記している。しかしその内容はこの地域の全体像をおさえたものとはいえない。南部牛の流れをくむ日本短角種の主要生産地であるこの地域で、数少ない馬の飼養には言及しながら牛については何も述べず、20年以上前の殺人事件をいかにもこの地域特有の事件であるかのごとくおどろおどろしく描くなど、疑問の残る紀行文である。

この年東宝が製作した「大怪獣バラン(1958)」は、この怪獣バランの出現地を「日本のチベット」とよばれる東北地方の北上川の上流の秘境としている。映画に出てくる地図上では、北上山地というよりは奥羽山脈にあたる位置に設定されているが、テレビが一般家庭に普及する直前の当時、ニュース映画に続いて最大の娯楽メディアだった映画の本編にまで、ついに「日本

のチベット」が登場したことになる。ただし現在販売されているこの映画のビデオでは、「日本のチベット」という表現の部分の音声はカットされているため、確認することは出来ない。

このように 1958(昭和 33)年は、「ものいわぬ農民」をはじめとして様々なメディアで「日本のチベット」が取り上げられ、この表現が全国に知れわたった年であったといえる。

1959(昭和 34)年から 1961(昭和 36)年までは、宮本常一、深田久弥、きだみのるらの著書にもこの形容がみられるようになる。

宮本常一は、1954(昭和 29)年から 1961(昭和 36)年までは結核の再発や十二指腸潰瘍の発病などもあって旅に出るペースを落とし、本の執筆や編集に力を注いだ時期であった。この結果、1960(昭和 35)年に宮本は博士号を取り、このころ「これからは面白くて売れる本を書きますよ」と語っていたという(「宮本常一同時代の証言」p 197)。その言葉通り 1961(昭和 36)年「日本の離島」によりエッセイストクラブ賞を受賞し、執筆活動によって生計も維持できるようになって(宮本、1978「民俗学の旅」文藝春秋)、渋谷屋敷を出て家を購入し、1962(昭和 37)年妻子を上京させて同居するようになり、1964(昭和 39)年からは武蔵野美術大学に勤務するようになる。宮本の仕事が世間に広く知られはじめ、経済的にも安定していった時期であるといえよう。

こうした 1959(昭和 34)年から 1961(昭和 36)年にかけて宮本が監修・編集にかかわった 5 冊の本にいずれも「チベット」を用いた形容があらわれる。1959(昭和 34)年「日本残酷物語 第一部貧しき人々の群れ」および 1966(昭和 35)年「日本残酷物語 第二部忘れられた土地」の場合は執筆に大牟羅良が加わっているので、この表現は大牟羅の執筆した箇所であろうと推定できる。「風土記日本第 5 巻東北・北陸編」も大藤時彦、鎌田久子との共同編集であり、「日本残酷物語」と同様に谷川健一が編集にかかわっていることもあって、こうした形容が使われていることが宮本によるものとはいえない。しかし 1960(昭和 35)年の「僻地の旅」(修道社)、1961(昭和 36)年「秘境」(有紀書房)は、宮本常一の単独編集で、特に後者の「北上山中」を担当したのは、彼の弟子で後に宮本の武蔵野美術大学の職を引き継ぐことになる、田村善次郎であった。宮本自身がこの形容を使っているわけではないが、編者としてこの形容を受け入れていたことは、先に引用した宮本の発言と無関係ではないように思われる。

1958(昭和 33)年には第 28 回国会建設委員会でもこの形容が用いられるまでに一般化していく。記録に残っているなかではじめてこの形容を用いたのは、当時の農林省農地局長・安田善一郎で、台風常襲地帯における災害の防除に関する特別措置法案についての発言のなかであった。表 2 にみられるように、その後も 1960(昭和 35)年第 35 回国会の建設委員会で 1 回、1964(昭和 39)年の第 46 回国会災害対策特別委員会で 3 回、1966(昭和 41)年第 51 回国会内閣委員会この表現は国会の各種委員会では、特に当該地域がいかに国の助成やインフラ整備を必要としているかを強調するために汎用されたようである。

1964(昭和 39)年の立命館大学探検部による人文班調査報告書(1964)では、住民のパーソナリティの章で、「チベット」という表現をめぐって詳しい記述がなされている。これによれば、4、5 年前から毎年のように様々な分野から、研究者やジャーナリストらの調査が安家地区に入り、この地域を「チベット」という表現とともに蔑視的に取り上げられることに迷惑し、反発してい

た。しかし一方では「チベット」であることを認め、自分たちが貧しく遅れているとあきらめているかのような態度をとることが報告され、こうした地域に対する劣等感を報告書の著者は、「チベット意識」と呼んでいる。

また、彼らが調査計画書に「チベット」の語を用いたところ、岩手県の地元新聞社や県庁の職員から住民の感情を害し反感をもたれるから使わないほうがいい旨、注意を受けた。その背景には、「岩手の人はこのチベットという言葉に非常にこだわっているともいえよう。それは、北上山地の人たちと一緒にされたくないという気持ちも働いているようにも見えるのである。」とし、大牟羅良の「岩手の保健」への評価にも同様の、「これから伸びようとしている岩手を過去の姿としてとらえる」という批判が存在していたようである。当時の「チベット」を用いた表現に対する岩手県の反応が垣間見え、興味深い。

昭和30年代(1955～1964)には、かつて「岩手のチベット」として、岩手県の人々が岩手県の特地域をさすものであった「チベット」を用いた表現が、「日本のチベット」として独り歩きをはじめ、全国的に知れわたった。新聞のみならず、旅行雑誌の紀行文から、週刊誌や総合誌、教科書の副読本、ニュース映画、怪獣映画、著名随筆家の著作や民俗学者の編集した本など、多くのメディアでこの表現が用いられた。こうした流れの中で、岩手県全体が日本の中の「チベット」と表現されるようになってしまったことへの戸惑いと反発が見てとれる。そして「チベット」を用いた形容が指し示す内容も、昭和20年代のような開発が必要な地域というよりも、怪獣さえ現れそうな化外の地として好奇の眼を持って紹介する動きも出てきた。

3. 昭和40年代(1965～1974)以降の「チベット」を用いた形容の展開と終息

昭和40年代(1965～1974)では17例中13例が「日本のチベット」で、「岩手のチベット」の例はない。ほかに「チベット地帯」が2例、「チベットの」、「東北のチベット」の用例が各1例みられる。

昭和50年代(1975～1984)は、17例中14例が「日本のチベット」で、「岩手のチベット」、「東北のチベット地帯」、「チベット」が各1例あった。

1985(昭和60)年以降は事例が少ないのでまとめるが、6例中「日本のチベット」が5例、「岩手のチベット」が1例だった。

脱稿から約7年後に出版されたとされる中野(1969)によれば、1962(昭和37)年ごろ、「ジャーナリズムにはチベット・ブームとでもいうべきものがあつた。」と述べている。以下、中野の著作(1969)によって述べていくが、当時、岩手の山奥に行けば前世紀の遺物とでもいうべき珍奇な風習が残っていると考えられ、中野が村長を務めた江刈村にも、新聞社やテレビ局が特集記事や特別番組を制作するためにやってきた。

この時期に中野は、当時岩手放送社長の太田俊穂氏に以下のような協力の依頼をうけたという。太田は、大牟羅(1958)によって「日本のチベット」が流行語のようになり、岩手県民はいろいろと迷惑な思いをしてきたが、さらに大牟羅によって岩手の農民は軍隊に郷愁をもっているというエッセイが発表された。就職試験でも、岩手県出身者が筆記試験をパスした後の面接で、

「日本のチベット」で育ったような人には我社の仕事は無理だ、と落とされるような事態にもなっているとし、こうしたことによって県民の劣等意識が助長され、また岩手県民の評価が貶められるようでは無視しておけないから、これに対抗するキャンペーンを起こしたい、ともちかけた。中野はこれに同意し、朝日新聞に一文を投稿した。

その内容の一部を要約すると、自分は「日本のチベット」と呼ばれる村に生まれ育ち、村長や農協組合長もやったが、未だに農民のことがよくわからない。しかしだからこそ、農民について断定的な論説を読むと反論したくなる。大牟羅良氏の「ものいわぬ農民」を読んだ時もそうだった。しかし、おそらくこの本は都会では受けるだろうと感じ、事実そのようになったが、岩手では不評であった。大牟羅は岩手の農民が「米の飯を食わせて革の靴を履かせてくれて、軍隊はいいとこだった」と言っているというが、その言い方は農民のユーモアであり、反語である。農民とは、馬鹿かと思えばインテリもかなわない知恵をもち、純真かと思えば狡猾で、どこか抜けている存在で、われわれにはとてもつかみきれない存在ではないか、というものである。

筆者も北上山地の山村に18年間暮らした経験を持つが、そこに暮らす人々が「ものいわぬ」どころか、ユーモアと旺盛な批判精神と逆説的表現を駆使した豊かで楽しい会話の達人たちであると感じることが多く、この中野の意見には同意するところが多い。もう少し脱線させてもらえば、そうした彼らの巧みな発話能力の豊かさを的確に描き出した文学作品として、石上玄一郎の「魍魎魍魎」を高く評価する。それは決して暗くも惨めでもない北上山地山村の闊達な農民像を描いた文学作品として、稀有なものといえよう。

ところで「こころの瞳」(岩手放送編、1966)という、岩手の小中学生の作文で構成された本がある。太田俊穂の勤務先の同僚であった福田常雄が編集を担当した。『「日本のチベット」岩手県の僻地に生きる児童たちが綴った作文と詩を編んだ話題の書。』というのが出版社側の宣伝文であるが、本には「日本のチベット」という言葉は出てこない。当時のこのテーマの本で、出版社側が使用したこの形容を用いていないということは、かなり意識的にこれを避けたものとみて間違いなからう。ちなみに太田が社長を勤めていたテレビ局では、岩泉町立安家小学校松ヶ沢分校に臨時教師としてやってきた大学生の生活記録をテレビ放映したこともあり、それを偶然テレビ局で見ていた金田一京助が涙したというエピソードを太田は随筆に記しているが、やはりここでも「・・・のチベット」の表現は避けている。

福田はこの本のまえがきで、「奥羽山系と北上山系の二つの山ひだにつつまれた村々は、確かに日本のいうところの辺地を代表しています。電灯がともらない谷間もあれば、バスの幹線からとり残されている沢もあります。しかし、そこには都会の生活では得られない子供たちだけの、果てしないロマンの世界があることが、この文集から明らかです。」と述べ「牧草を背負って稜線をくだる子供たちの、青く澄み切った瞳には、辺地の貧困と暗さばかり探ろうとするおとなたちの心がむしろ滑稽なものに映るのではないのでしょうか。」としている。本の最後に出てくる作文は「私達は白いごはんを食べています」という題で、自分の通う中学校が辺地の代表のように雑誌(「女学生の友」)にあつかわれ、読者から届いた多くの励ましの便りが、

「白いご飯を見たことがないそうだ」とか「弁当も持ってこられないそうだ」というものだったことへの反論が書かれている。太田はこの本「こころの瞳」をいつも机の上に乗せ、好きな作文を読み返していた（太田、1977）。

本「こころの瞳」とタイアップして2ヵ月後には、岩谷時子作詞、いずみたく作曲、梶光夫歌で「こころの瞳」がコロムビア・レコードからシングルカットで発売されている。ジャケットの一部には、本「こころの瞳」の装丁に使われた岩手県岩泉町の児童が描いた風景画が使われ、ジャケット裏の歌詞の最後には『「こころの瞳(大和書房刊)より」』と記されている。作詞・作曲はいずれも名の知れた一流どころであり、梶光夫は今では忘れられた観があるが、1963(昭和38)年にデビューし「青春の城下町(1964)」のヒットで、当時の御三家（橋幸夫、舟木一夫、西郷輝彦）に続く人気を得、その後も高田美和との純愛デュエット路線でヒットをとばしていた人気歌手だった。スタッフからみれば、当時として決して手を抜いた企画であったとは思えない。B面には「啄木のふるさと」で、北寿の名で太田俊穂が作詞し、『こころの瞳』は一時は有線放送にリクエストが相次ぎ、本もよく売れたという(前野、1970)。

本が原作となって作られた歌が大ヒットした例として挙げられるのが、青山和子の「愛と死をみつめて」で、1964(昭和39)年のレコード大賞を得ている。この原作本も同じ大和書房の出版(1963)で、150万部の大ベストセラーとなり、テレビドラマにも映画にもなった。レコード「こころの瞳」は実際にはあまりヒットしなかったようであるが、こうした路線を狙ったものであったと思われる。ちなみに「こころの瞳」はCD2枚組みの岩谷時子の作品集に選曲されており、現在も聞くことが出来る。

レコード化に太田の力がどれくらい及んでいるかはわからないが、太田自身、南部藩の維新史関係の本を大和書房から出しており、つながりは深かった。本の出版時期とレコード発売の時間的な差がさほどないことから、本の出版とレコード化は連動的な企画だった可能性も考えられる。私はこれが「チベット・ブーム」に対抗するキャンペーンの一部ではなかったかと推察している。

「チベット」を用いた形容からは離れるのだが、本「こころの瞳」の出版された時代、1965(昭和40)年に岩手県の玉山村(当時)で始まった欠食児童をなくすための「スズラン給食」は、児童生徒が摘んだスズランをライオンズ・クラブが買い取って、その基金で給食設備を整備するというものであった。これが当時の首相・佐藤栄作の耳に入り、閣議で「へき地給食特別助成措置」が決まった。この時代の首相はまだ、地方山村に苦しい暮らしがあることを、自らの体験と重ね合わせて理解することが出来たのだと思われる。しかしあわせて現地の貧しさが誇張されて報道され、現在でも地域でこの話題はタブーになっているほど、大きな傷を残している。先に述べた、本「こころの瞳」の作文「私達は白いごはんを食べています」は、この「スズラン給食」を取材した雑誌記事で学校名が挙げられ、誇張された貧困の報道とそれを真に受けた読者の反応に対する反論であった。そしてこの本の印税と出版社からの寄付を合わせた34万円が、岩手放送を通じて岩手県教育委員会に寄付され、へき地の育英資金にあてられた(前野、1970)。

このほか昭和40年代(1965～1974)では、秘境というキーワードで日本各地の取り上げた本も増え、そのなかで、「チベット」を用いた形容が用いられ、用便の方法にいたるまで、非常に野卑な興味本位の取り上げられ方をしている(作木田、1968；伊能、1974)。いまだにこんな暮らしをしている地域がある、という紹介の読み物である。ただ文章の内容から判断して、昭和30年代(1955～1964)にかかれたものである可能性が高く、いわゆる「チベット・ブーム」時代の産物としてみるほうが正しいかもしれない。

また遠藤(1973、1983)は実際に岩泉町で教員生活を経験した北上山地の山村をよく知る児童文学者であるが、「原生林のコウモリ」(1973)のなかでこの形容を用い、10年後「イヌワシと少年」(1983)にもこの形容を用いた。作品は貴重な野生動物についての保護の重要性や、少年との心の交流を描いた秀作である。しかしこの時期に至っても、こうした地域の人々が否定的な感情を持つ形容の存在を全国の児童に対して伝えることが、表現上どうしても必要であったのか疑問である。もともとこの表現が昭和20年代(1945～1954)には教員関係者の間でよく用いられていた傾向を前に述べたが、筆者も元教員であることが、1975(昭和50)年になってもこの形容にこだわったひとつの理由であるのだろうか。

1975(昭和50)年には、すでにこの形容が放送禁止用語になっていることがわかる(放送批評懇談会、1975)。小田切(1975)では農村恐慌期の宮沢賢治の苦悩と「日本のチベット」の形容が重ねあわされているが、昭和初期にはまだこの形容が成立していないことはすでに述べてきたとおりである。前野によって「日本のチベット」の形容について、特にその起源についての聞き書きがはじめて示され、こうした形容をどのようにとらえるべきかが考察された初めての文献となった。また森村(1977)、岩間(1977)が小説でこの形容を用い、前者は映画にもなった。

昭和60年代から平成に至ると、この形容もあまり使われることはないが、それでも最近においても岩手県知事(2005)が、岩手県がかつて「日本のチベット」と呼ばれたことを新聞のインタビューのなかで答えている。

1965(昭和40)年以降は日本のチベットイコール岩手県と日本中からみられた状況を跳ね返すべく、ここで述べた以外の面でもさまざまな努力が重ねられたと思われる。一方では日本の秘境としてこれまで以上の興味本位の取り上げ方をする出版物もあらわれた。しかしおそらく昭和40年代(1965～1974)のいずれかの時点から「チベット」を用いた形容は放送禁止用語となり(放送批評懇談会、1975)、新聞記事でもその形容はみられなくなり、その使用は昭和30年代(1955～1964)に比べて明らかに減少していった。

その半面で、この形容が北上山地山村を指すものから岩手県全体を指すものとされ、これが岩手県にとっての発展の障害と認識されたことを契機に、岩手の大きな課題とされてきた北上山地山村の存在は取り上げられることが少なくなっていくように思われる。昭和30年代までは、大きな問題を含む「・・・のチベット」という表現が用いられているものの、しかしそのように表現されるような地域の存在が無視できないものとして、たとえそれが予算獲得の象徴的な存在に過ぎなかったにしろ、岩手県および国の政策課題の一つとして取り上げられてきた。しかし人口の都市への再集中化が高度経済成長期に進み、大陸からの引揚者らの開拓や食糧増

産の必要もなくなり、山間の一大産業で労働人口を山へとひきつけた製炭業もエネルギー政策の転換によって消滅していった。

交通の面で見ても、たとえば岩泉町を例にとると、藩政時代は盛岡・岩泉間は、盛岡から藪川を経て、早坂峠を越えて岩泉に至る牛の背による物流が行われていたが、戦前の石上源一郎の作品のように東北本線の沼宮内駅開通後は岩手町から葛巻町を経て国見峠を越えて岩泉に至る新小本街道が開通する。戦後もこのルートが使われていたが、1961(昭和36)年の外山早坂高原県立自然公園の指定を受けて、早坂を経由して岩泉に通ずる主要地方道・盛岡－岩泉線(現在の国道455号線)が整備された。さらに国鉄岩泉線が1972(昭和47)年に岩泉まで開通し、かつてのような交通の便の悪さは解消されていった。昭和30年代には、北上山地の山村を訪れる人たちは、岩手県庁のジープに便乗してこの地域に入ったとする記述が多い。きだみのるの場合は1960(昭和35)年ごろ、自家用車フォード48で日本中を「漂流」していたのだが、北上山地への道路はジープでなければ無理だとアドバイスされ、訪問を断念している。しかし県庁からこうした便宜を受けたわりに、彼らが書く内容があまりに露悪的で驚くし、しかし県はそうした未開発の地域の存在を広く知られることのメリットも考えて便宜を図っていたのかとも思えるのだが、交通機関の発達でこうした例も以後見られなくなっていった。

こうしたなかで、1969(昭和44)年の「新全国総合開発計画」では、北上山地が大規模畜産開発プロジェクト地域の一つに選定された。それを受け、1975(昭和50)年に畜産を基軸とする大規模生産団地の創設を目ざした「北上山系開発事業」が開始され、8地区約1万ヘクタールの開発が進められた。この事業は1987(昭和62)年に完了し、隆起準平原と呼ばれる山頂付近の高原部の野生シバ草地を中心に5,665ヘクタールもの面積が人工草地へと姿を変えた。北上山地の生業複合のなかで畜産振興を主軸として、ついに北上山地の地域開発に国が乗り出したプロジェクトではあったが、輸入自由化で畜産品の価格は下落し、畜産は農家を支える生業とはなりえず、1990(平成2)年以降は高齢化により畜産をやめる農家が相次ぎ、広大な人工草地は放棄されつつある。高いところでは1,000メートルを超える山頂まで、木々を伐採して人工草地を造った結果、北上山地は「風衝荒廃地」という負の遺産まで背負い込む結果となった。

広大な国有林の天然林も伐採しつくし、若者がいなくなった山村が残された。現在、過疎化・高齢化が進行して人口が減少し、かつて「チベット」を用いた表現と共にあれほど問題にされた人口密度はさらに希薄になり、総合開発計画によって膨大な地下資源が豊かな富をもたらす筈だったのに、結局何らの地下資源開発も実施されなかった。1970年代に安家地区の石灰岩開発の動きが出たが、地域とは縁もゆかりもない自然保護団体の反対もあって、結局中止となった。たとえそれが名目的なものであったにしろ、北上山地の山村を振興しようとしたかつての努力は忘れられ、より疲弊した山村が残されかのようである。

4. 日本の戦後における北上山地山村像

北上山地の山村は頻繁に「チベット」を用いた形容が用いられたことからわかるように、特異な地域として好奇な眼にさらされてきた歴史を持つ。この「チベット」を用いた形容に着

目してその言説の変遷を追ってみると、戦後すぐの時期には、岩手県内で北上山地山村を僻地として差別化するために「岩手のチベット」として用いられていた形容であった。例えば盛岡市では、田舎者を差別化する際に、「在郷太郎」などといった形容が用いられていたが、「チベット」を用いた形容も同様に用いられていたと思われる。

ところが昭和30年代(1955～1964)に、「チベット」を用いた形容が全国に広まると、「岩手のチベット」から「日本のチベット」という形容が多用されるようになる。岩手県そのものがこの形容に該当する地域とみなされ、さらに北上山地山村には特異な風俗を求めるマスコミがあらそうように取材に訪れる「チベット・ブーム」にさらされ、大学生の就職にも差し支えが出るという風評被害の対応に、岩手の文化人・知識人が苦慮した様相が見て取れる。また北上山地の山村に暮らす人々にとっても、自らの生活が興味本位に同情と蔑みの眼で取り上げられ、事実と異なる誇張された報道が相次ぐ、忘れがたい嫌な経験であった。

しかし一方では、多くの都市生活者がすでに都市で生まれ育った世代に交代した現在とは異なり、高度経済成長期前後の人口が地方から都市に集中していく過程のなかでは、地方生活体験がある人が多く、あるいは父母はそうした地域に暮らしており、都市生活者も地方あるいは農山村の暮らしを体験的に理解し、その困難な部分もわかっていた時代であった。そうした人々の間で、こうしたマスコミ報道がかつての農山村での自分の暮らしの実態のどこかにわずかながらでも抵触する部分もあって、こうした報道が広く受け入れられたという側面もあったであろう。日本の地域開発政策のなかで「地域間格差」、「格差是正」の言葉が生きていたこれらの時代においては、非常な歪んだ形ではあったにしろ、こうしたマスコミのあおりのなかで、国民の眼がこうした地域に向けられ、当時指摘されていた地下資源なども含めて、日本国内にまだまだ開発あるいは格差を是正すべき地域があるということが、おおむねコンセンサスを得ることが出来たという意味では、無視することは出来ない。

大きな問題は、おそらくこれらの意味合いもこめて国費を投入された「北上山系開発」が、特段の成果を結ばなかったことである。その原因についてここで詳しく触れる余裕はないが、要するに地域の特性や実態、住民の意見や合意、そして国の政策（畜産物の自由化による価格下落など）に合致しない計画が作られたことが一番の原因であろう。北上山地山村の未来を、畜産という産業だけに集約して将来性が保障できるのかどうか、その分析が甘かったといわざるを得まい。むしろその実態である森林資源を基盤とした生業複合系の全体的な底上げが、きちんと議論されるべきだったのではないだろうか。

そしてこの地域は「チベット」を用いた形容で呼ばれることもなくなったかわりに、地域の将来についてどこからも取り上げられることもなく、過疎・高齢化に蝕まれ、新自由主義経済による「構造改革」が叫ばれるなかで多くの人々が職を失い、宮本常一や大牟羅良らが好んで使った形容を用いれば、「忘れられた」存在になってしまっている。

なお、本稿を書くにあたって利用した参考文献は、すべて表1の備考に示してあるので、こちらをご参照いただきたい。

表 1. 「チベット」を地域の形容に用いた表現例

西暦(昭和)	表現	対象地域	出典
1933(昭和8)～1934(昭和9)頃	「チベットみたないなひどい創」	川口村 (現岩手町)	村田幸之助「川口村村長による知事への陳情 (前野和久「岩手の再発見」1976年、熊谷印刷出版)
1939(昭和14)	「まるで蒙古か西藏じゃないか」	葛巻町～岩泉町	石上玄一郎「郷地題題」『日本評論』6月号
1945(昭和20)	「岩手のチベット」	不明(分校)	昭和20年当時の日記 (一条ふみ「淡き純絵のために 戦時下北方農民層の記録」1976年、ドメス出版)
1947(昭和22)	「岩手チベット」	下閉伊	金野祐郎「岩手チベット！下閉伊の農地改革」『岩手農地通報』第1巻第6号 岩手県農地部農地課
1948(昭和23)	「岩手のチベット」 「九州のチベット」	下閉伊 日田	S生「岩手のチベット下閉伊の実体」その鍵は今後の指導如何に「『岩手農地通報』第2巻第4号 毛利次郎「西日本・名勝者：日田は九州のチベット」『九州春秋』第14年第139号 九州春秋社
1949(昭和24)	「西藏」	暗山村	鈴木照一「西藏の一角より暗山村実地調査」『岩手教育』第24巻第4号 岩手県教育研究所
1950(昭和25)	「岩手のチベット」 「岩手チベット」 「岩手のチベット」	普代村・安家村 岩泉町・小川村・大川村・小本村・安家村・有芸村・普代村・田野畑村・田老町・宮古市・新里村・川井村・江刈村 安家村 下閉伊郡北部岩泉町他7か村	佐々木久蔵「わが郷土岩手県」清水書院 横田孝八「岩手縣新誌」日本書院
1951(昭和26)	「秘鏡チベット」 「岩手のチベット」 「日本のチベット」	安家村 岩泉町・小川村・大川村・小本村・安家村・有芸村・田野畑村 有芸村・安家村・山形村	伊藤登喜男「安家村を訪ねて」『岩手の保健』14号 岩手県国民健康保険団体連合会 「忘れられた村 盛夏の遺物①」『毎日新聞』7月27日 奥山美智子「山奥の寒村に乙女の命ささげざる愛の女教師の手記」『婦人生活』1月号 杉村広郎「岩手のチベット(1)」『岩手の保健』19号 岩手県国保連
1952(昭和27)	「ニッポンの西藏地帯」 「チベット地帯」 「チベット地帯」 「チベット地帯」	杉村「岩手のチベット(1)」と同じ 下北(下閉伊郡北部の略称) 不明	大牟羅良「夢のない村 一九九郡山形村、村生活の一断面」『岩手の保健』19号 岩手県国保連 杉村広郎「岩手のチベット(2)」『岩手の保健』20号 岩手県国保連 箱石文治「へき地外出」『北流』第8号 北流編集委員会 「レポルタージュ・炭を焼く人々——東北のチベット地帯をゆく」『農林春秋』第2巻第4号 農林協会
1953(昭和28)	「岩手チベット」 「岩手のチベット」 「岩手のチベット」 「岩手のチベット」	岩泉町とその周辺域 山形村 有芸村 蔵川村	「酪農の心」地岩泉「朝日新聞」1月27日 大牟羅良「農村の世間体」『東洋文化』通巻12号 東京大学東洋文化研究所 「デタラメな有芸村」『朝日新聞』6月7日 「文部委も驚く辺地教育の実情」『朝日新聞』9月5日
1954(昭和29)	「岩手のチベット」 「和賀のチベット」 「岩手のチベット」 「日本のチベット」 「チベット地帯」	下閉伊郡 西和賀地帯 小本・安家村 安家村 安家村・有芸村	「忘れられた」供たち「朝日新聞」1月10日 「辺地の実情スライド」に「朝日新聞」1月25日 村田孝介「まか、郷土のすがた岩手県 社会科副読本」琴城出版社 (発売・東山堂書店) R(大牟羅良)「日本のチベット安家村とお寺」『岩手の保健』38号 岩手県国保連 桑原武夫「しろうと農村見学」『世界』11・12月号 岩波書店

[illegible]

1964(昭和 39)	「日本のチベット」 「岩手のチベット」 「チベット意識」 「チベット地帯」 「日本のチベット」 「チベット地帯」 「日本のチベット地帯」 「東北のチベット」	明示せず 明示せず 安東地区 岩手県北と沿岸地帯 岩泉町・田野畑村・久慈市・山形村 青森・岩手にわたる豪雪地帯 三陸 岩泉	立命館大学探検部「探査」12号 立命館大学探検部「探査」12号 立命館大学探検部「探査」12号 岩動道行 第46回国会災害対策特別委員会第3号(2月20日) 塚田徹 第46回国会災害対策特別委員会(3月10日)第4号 渡辺勲吉 第46回国会災害対策特別委員会(3月13日)第6号 岡田喜秋「三陸海岸断絶」『日本の旅路 その詩と真実』日本経済新聞社 岡田喜秋「三陸海岸断絶」『日本の旅路 その詩と真実』日本経済新聞社
1965(昭和 40)	「日本のチベット」 「日本のチベット」 「日本のチベット」 「日本のチベット」	旧江刈村 岩泉町安家・小川・岩泉各地区 北上山地の北部・岩泉町 北上山地	桑原武夫「ふたたび江刈村へ」『学芸会報』11号 「日本のチベット」で『日本農業新聞』9月20～27日 三上信夫編「埋もれた母の記録 日本のチベット・北上山地に生きる」未来社 宮川澄ゼミナール「辺地農民の意識と生活構造 ー岩手県下閉伊郡岩泉町安家の実態調査ー」
1966(昭和 41)	「日本のチベット」 「日本のチベット」	青森県東海岸・岩手県北部 北上高原・峡谷地帯	米内山義一郎 第51回国会内閣委員会第18号(3月22日) 「北上山系山村のすがたと進路」No.5 山村振興調査会
1968(昭和 43)	「日本のチベット」 「チベット地帯」 「チベットの」	岩手県 北上山地北部 安家村	石上玄一郎「神秘の迷宮・安家村」『秘めたる旅路』日本交通公社 作本田龍善「日本の秘境」読売新聞社 作本田龍善「日本の秘境」読売新聞社
1969(昭和 44)	「日本のチベット」 「日本のチベット」 「チベット地帯」	岩手県 岩手または下閉伊郡門馬村、 岩泉町安東地区	中野清見「原型的日本人」東京美術 野添憲治「少年伐採夫の記録」谷川健一(注)『ドキュメント日本人7 無告の民』学芸書林 「陸」東山山村のすがたと進路 No.55 山村振興調査会
1970(昭和 45)	「日本のチベット」	北上山地一帯・玉山内蔵川	前野和久「へき地を告発する」野火書房
1972(昭和 47)	「日本のチベット」	北上山地	林礼二「流通化のなかの北上山地」西川大二郎(注)『日本列島農産漁村その現実』勁草書房
1973(昭和 48)	「日本のチベット」 「日本のチベット」 「東北のチベット」	岩泉町 北上山地 「東北のチベット」	遠藤公男「原生林のコウモリ」学習研究社(児童文学) 河北新報盛岡支社編集部「北上山地に生きる」勁草書房
1974(昭和 49)	「日本のチベット」	北上山地	伊能孝「現代の秘境 知られざる日本」弘済出版社
1975(昭和 50)	「日本のチベット」 「日本のチベット」 「日本のチベット」	過疎地帯・高山地帯・深山地帯・ 岩手県北部 岩手県	放送批評懇談会「使えない日本語 放送テープの実態」いれぶん出版
1976(昭和 51)	「日本のチベット」 「日本のチベット」 「岩手のチベット」	岩手県 岩手県	小田切秀雄「現代文学史 下巻」集英社 前野和久「岩手の再発見」熊谷印刷出版 『北上山系』IBC
1977(昭和 52)	「日本のチベット」 「日本のチベット」 「日本のチベット」 「日本のチベット」	田野畑村 岩手県 北上山地 北上山系	本多勝一「南部のくに」(現地文集からの引用部分)『そして我が祖国・日本』すずさわ書店 田川義郎(注)「もうひとつの昭和史 ー北上山系に生きた人々」辺境社 森村誠一「野生の証明」角川書店(小説) 岩間芳樹「北上山系」三笠書房(小説)
1978(昭和 53)	「日本のチベット」	北上山地	佐藤誠一監修『野生の証明』角川映画 原作・森村誠一 脚本・高田宏治 出演＝高倉健ほか
1980(昭和 55)	「日本のチベット」 「東北チベット地帯」	北上山地 安家村	松尾幹之「南部名子制度の構造と変貌」名古屋大学農学部食料生産管理・学講座研究報告第18号 松尾幹之「南部名子制度の構造と変貌」名古屋大学農学部食料生産管理・学講座研究報告第18号
1981(昭和 56)	「日本のチベット」	北上山地の村々・岩泉町安家	市川健夫「日本の馬と牛」東京書籍

1982(昭和 57)	「日本のチベット」 「日本のチベット」	岩手県のへき地地帯 北上山系	「岩手近代教育史 第三巻 昭和Ⅱ編」岩手県教育委員会 定村忠士「北上山地に炭焼きをたずねて(三)」「未来」第192号 未来社
1983(昭和 58)	「日本のチベット」 「チベット」	北上山地	遠藤公男「イヌワシと少年」階成社
1984(昭和 59)	「日本のチベット」 「日本のチベット」	北上山地 北上山中の村々	長江好道「北上山地に生きる教師と子どもの教育百年」『北上山地の山かげから』三省堂 高田宏『対話「東北」論』福武書店
1986(昭和 61)	「日本のチベット」	岩手県	石上玄一郎「太宰治と私 激浪の青春」集英社
1994(平成 06)	「日本のチベット」 「岩手のチベット」	岩泉町	楠村武司「林野庁解体」日本経済評論社
1995(平成 07)	「日本のチベット」	岩手県	長江好道ほか「岩手県の百年」山川出版
1999(平成 11)	「日本のチベット」	岩手県北上山地の山中・達管部	達管拓也 第145回国会法務委員会第26号(8月3日)
2005(平成 17)	「日本のチベット」	岩手県	増田寛也(岩手県知事)「都会の後追いもうやめた」『朝日新聞』1月1日

*なお昭和31年に岩泉町・大川村・小本村・安家村・有芸村が合併して岩泉町となり、翌年に小川村が岩泉町と合併しており、これが対象地域の表記の変化に反映している。